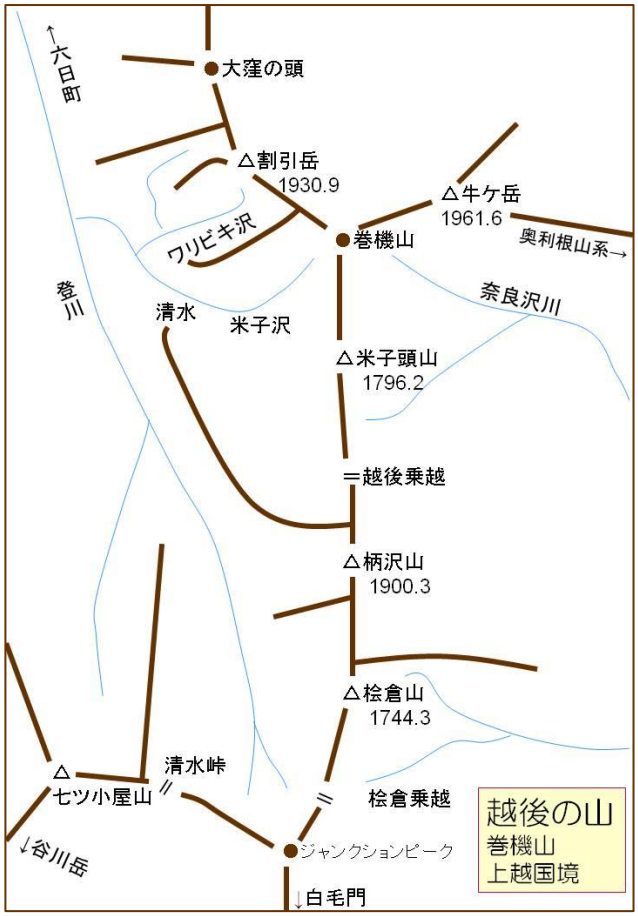
越後	清水から巻機山ピストン	No.065

今年の夏は飯豊連峰へ行くことになった。下調べのために以前から持っていたガイドブック 「東北の山」に加えて「越後の山」も手に入れ、予習を始めた。見ていると、飯豊どころではなくなった。
越後三山、苗場山、巻機山（まきはたやま）・・・・・。いくつでも登りたい山が生まれてくる。
中でも会社の K さんが絶賛する越後三山と「日本百名山」にも載っているという 「巻機山」が頭の中にこびりついてしまった。巻機山を谷川岳東面の白毛門山から縦走することを思いついた。この稜線にはごく最近切り開きが付けられたらしいが、それまではヤブコギストだけの聖域だったようだ。

昭和41年6月24日
金曜日、全共連での仕事を終えて上野駅へ直行。22時03分発秋田行、桶川に帰る Y 氏が一緒。バナナを差し入れしてもらい、久しぶりの遠出にファイトがわいてきた。しかし天気は思わしくない。
列車は空いているので、桶川で Y 氏と別れたあとはワンボックスを占領して、眠りに。
土合から白毛門への苦しい登り、桧倉乗越での幕営、池塘と草原の巻機山、想像の世界はレールの響きに合わせてそこはかとなく続き、途絶えることを知らない。だが、この想像の世界を自分のものにするためには、なんとしてもこのレールの響きを子守唄にして、熟睡する必要がある。いつしか瞼に映像は浮かばなくなった。

昭和41年6月25日
横着に座席に横になったままで駅標を確かめようとしたが、なかなか見えない。やむを得ず半身を起こしてみると「水上」と見えた。雨が静かにしかも落ち着いて降っている。土合まで行ってみて、もし雨がひどい場合は下車するのをやめて、六日町まで行ってしまうことにした。今回の主目的は巻機山なので。
土合2時42分、いくらか小降りになったのを見て下車。駅舎の中で朝食。パン、チーズ、バター、それに Y 氏差し入れのバナナ。たいした降りではないので4時に出発。
東黒沢を渡り、ポンチョに汗と雨水をべとつかせて一時間ほど登った頃、心憎い雨はまた意地悪く降り出した。明け方の空は白く重い雲をたれて、期待など抱くべくもない。傍らの大きな木のほこらの中に体を休めてしばらく様子を見ることにする。ところが、良くなるどころか、雨滴は徐々に粒を大きくして、雨音も力強くなってくる。
もうお手上げだ！こんな雨に濡れて歩いても、途中に小屋はないし、肉体を疲労させるだけで何の利もなかろう。
タイミングを図って下りだすと、雲の切れ間にマチガ沢と一の倉沢が姿を見せ始めてきた。これは・・・？と再び期待の気持ちが首をもたげるやまた大粒の水滴が。



迷いは捨てて下山を決意。朝食をとった土合駅に戻ると10時、昼食に土合ハウスのまずいラーメンを食べてもまだ列車までかなり時間があるので、空身で一の倉沢出合いまで散歩。

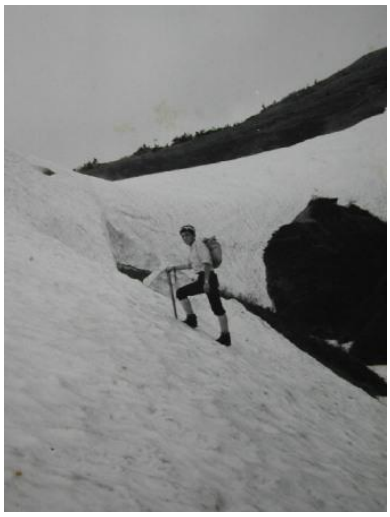
踏　み　跡　＜　My　mountains　＞

土合発12時39分の下り列車、清水トンネルを抜けると空模様はそんなに悪くもない。やがて午後の陽射しが車窓にまぶしくさえなってきた。
13時38分六日町に到着。初めて降りる駅だ。バス乗り場で時刻表を見ると次のバスは14時10分発だが沢口までしか行かないようだ。雨も上ったことだし、沢口から清水までぐらい歩いてもよかろう。
畑のど真ん中の沢口でバスを下りると15時。次のバスを待つか歩くか往生際悪く迷っていると、一台のライトバンが停まった。六日町の文房具屋の車で、清水の学校まで行くから乗って行かぬかと言う。
大分時間の節約ができた。清水の集落に15時30分に到着。ここは海抜 596mの谷間の集落。
学校の前を通り過ぎてしばらく行くと 「民宿こめご」 と書いた農家があるので、天幕場があるか聞いてみた。東大巻機山荘付近か橋のたもとなら水もあって良いだろうとのこと。
東大山荘は草鞋が干してある。沢登りにでも行っているのだろうか、人の気配がない。時刻は16時、そろそろ寝所を確保しないといけない。さらに奥に入り、道が大きくカーブするところに米子沢（こめござわ）にかかる米子沢橋、河原を見ると天幕を張れそうなスペースもある。ここを今宵の宿に決定。割引沢の Y 字雪渓が天狗尾根とともに柔らかな山容に力強いアクセントを与えている。初めて見る巻機山は今目の前にあり、想像以上に雪が残っている。日が照ってきたので温度計を見たら21℃あった。
これが夢に見た巻機山かと思うと胸の高まりを抑えられず興奮してくる。橋の下の天幕から顔を出すと、沈んでいく太陽に無黒山が黒く浮き出て想外の大きさ。米子沢の流れは冷たく透きとおり、天幕の周囲に快適な瀬音の幕を作っている。
何人もの登山客が橋を渡って登って行くので数えてみたら 27.8 人になった。
明日はどうしても晴れてもらいたい。ここまで来て登れずに帰るのでは純情な失恋に終わってしまう。

昭和41年6月26日
起床4時30分、快晴を約束する空に思わず大声を発してしまった。朝食のあと天幕を撤収しキスリングのパッキングをして橋の下に隠し、5時30分にサブザックで出発。ピッケルは持っていくことにした。夏の日が出るころ、橋の上に這い上がると女性三人のパーティが歩いてくるのに出会った。皆一様に目の覚めきらぬ表情で･･･その中の一人が、「マキハタワコノミチデスカ？」「ソウデスヨ」
この道のほかに道は一本もなかろうに、くだらないことを聞く人もいるものだ。
暑い登りに嫌気がさしていると五合目焼松、右下に米子沢のスラブを滑るように流れる水が見える。雪渓もだいぶ大きい。大源太山の異様な山容と苗場山の軍艦のようないでたちが目に付く。
桧穴の段7時10分、森林限界を抜け出し、足元は雪がなくなったばかりの未だ水っぽい草原となった。
うるさく付きまとうブヨの群れを追い払いながら汗をなめながら登る。偽巻機7時50分、一瞬頂上かと惑わされることからこの名が付いたらしい。頂上の巻機聖地まで、米子沢源頭部に大きな雪渓があり、その横に無人小屋が一軒建っているのがうかがえる。雪渓に下りて、中央部をキックステップで登って時間を稼ぐことに。(下の写真)

巻機聖地8時20分、巻機山頂上は 1967m。反対側の斜面は雄大な雪渓。そして魚沼三山が手に取れるような近さ。
雪渓で昼食の後牛ケ岳をピストン。牛ケ岳は1961.5m、三角点があるピークで谷川連峰のジャンクションピークから長い尾を引いている稜線がぶつかるところである。昨日があんな天気でなければ、この稜線を縦走してここにたどり着いたのにと思うと悔しさが頭をもたげる。牛ケ岳は池塘と大きな雪渓のほかに、尾瀬の至仏岳と武尊連峰の遠望が素晴らしい。
聖地に戻って一息ついていると今朝橋の上で出会った三人の女性が息も絶え絶えに登ってきた。Gパンをはいた単独行の男が一人、それに私。いつの間にか会話が始まった。

彼は、昨晩は桧穴の段でビバークしたと言う。「星がきれいだった」という言葉にも実感がこもっている。「オコジョにパンをかじられたので、パンを抱いて寝た」とかとか、彼の口から出るセリフは絶えることなく楽しい笑いを誘う。三人の女性達も転げまわるように笑いこけていた。破けたチョッキに墨で「南無妙法蓮華経」などと書いてある。彼は感激しきった口調でこう言った。



「上越は初めてだ。見ても周りの山の名もまだあまりわからない。だけど素晴らしい山だ。好きになった。」

女性群のひとりが一緒に写真を撮ろうと言うと、彼はやにわにザックの底からしわくちゃになった背広とYシャツ、ネクタイを出して、皆の目の前で着替えた。開いたザックの口を覗いたら、出掛けに貰ってきたという月給袋が無造作に突っ込まれていた。

とにかく、こんな笑いのうちにも話は弾み、一緒に割引岳を往復することになった。割引岳も三角点があり1930.8m。豊富なおやつとおしゃべりで、魚沼三山がガスに消えかかるまで時を過ごした後、朝の道を５人で下山。

米子沢の雪渓の冷たい水を飲んだり、あたりを見渡して景色を楽しんだりののんびりした下り道。後ろからついてくる女性人の中に、「あら、コイワカガミ」「ツガザクラみ　たい」「・・・・・」「・・・・・」「アラーすてきねえ」実に楽しそうな声が絶え間なく聞こえてくる。ここで私としてはかなりの力で後頭部を打ちのめされたような衝撃を感じた。今まで、「きれいな花だなあ」としか感じなかった数知れぬ植物群を、彼女らはコイワカガミ、ツガザクラ、・・・・と呼び分けているではないか。

自分は 60 回から山を歩いているのに、「きれいな花」という植物しか知らない。

山が好きだとぬかしたところで、一歩一歩足を進めているだけで瞬時を無駄にしていた自分に気がついた。

14時30分、米子沢橋の下でデポしたキスリングを引き出してパッキング。長い下りで乾いた喉、スラブを滑り落ちる水で潤して清水のバス停までもうひといき。

割引沢のＹ字の雪渓と黒い天狗尾根、南宋の水墨画を見ているかのような、単調な白と黒だけのそれでいて深みのある、見れば見るほどに立体感を感じさせる景観。段々に遠のいていく山波、次はいつごろ来られるだろうか、もう一度来てみたい山である。清水のバス停に16時35分に到着。

16時53分発の最終バスは小さなバスで、超満員。六日町の駅前であわただしく食べた一杯のラーメンが馬鹿に美味しかったことも思い出の記しに書いておきたい。

18時24分発急行第5佐渡、一様に真っ赤に日焼けした５人は一様に巻機山の魅力に酔いしれていた。

借り物のザックに書かれていたイニシャルから H さんと名付けられた彼（山元精一氏）、扁桃腺が痛いと虚偽の申告をして一日年休を取ってきたという太田さん、鼻の頭が真っ赤になった野中さん、背が一番高い阿部さん。皆素晴らしい旅人達だ。（上の写真）後日写真を提供することを約束して、それぞれの連絡先を教えあい、上野に着くまで雑談が盛り上がった。一人で出かけて五人で帰ってきたというこの山行は、目で見て素晴らしかった以外にも、色々な角度から思い出として残るものとなった。

以上

（修正・更新：2023年11月）